



Title	日本語・日本文化 第51号 奥付
Author(s)	
Citation	日本語・日本文化. 2024, 51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95223
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

執筆者紹介

加藤 均 本センター教授
中田 一志 本センター教授
今井 忍 本センター教授
荘司 育子 本センター教授
小森 万里 本センター教授
柴田 芳成 本センター准教授
山川 太 本センター准教授
松村 薫子 本センター准教授
水野亜紀子 本センター准教授

藤平 愛美 本センター講師
下村朱有美 本センター特任講師
松岡 里奈 本センター特任講師
中谷 真也 本センター特任助教
笹川 史絵 本センター特任助教
ヴルボウスキー
・マテイ 本センター特任助教
日比伊奈穂 本センター特任研究員
金 珠 本センター特任研究員
植原 邦佳 本学接合科学研究所教育系技術職員

編集後記

本号は加藤均教授退職記念号です。加藤教授の長年の功績と人徳によるところが大きいのでしょう。今号には多くの論考が集まり、またその内容も実に多岐にわたるものになりました。

退職される加藤教授からは、今回特別に日本仏教の「行」に関する論考を寄稿いただきました。

中田論文は、長門方言の文末詞ホとソについて考察したもので、今井論文は、「～する」に前接する語について論じられたものです。小森・松村・荘司論文は、コロナ渦において本センターがどのような取り組みをしたのかをまとめたものになっています。柴田論文は、町人の街・大坂で、大坂町奉行をしていた曲淵甲斐守景漸の判決について論じられたものです。山川論文は、普段日本語教育や教科書では出てこない「受身使役文」について考察したもので、水野論文は、芥川龍之介の『虱』を芥川自身の政治的思想が隠されているのではないかという可能性を論じたものです。藤平・中谷・笹川・マテイ論文は、VRシラバスの有効性について量的・質的の両面から分析したものになっています。松岡・植原論文では、大学理系研究機関における異文化間コミュニケーションの問題が質的に明瞭化され、下村論文は、渡日延期を余儀なくされた留学生が直面した困難点を明らかにしています。金論文は、日本語習得過程における音読の問題を考察したもので、下村・日比論文は、理系四科目の重要語に基づいた漢字リスト作成の試みについて述べられたものです。

今後も本センターに関わる皆様から、日本語・日本文化に関するさまざまな論考が提出されることを期待するとともに、本誌がより多くの方々に参照されていくことを願っております。

『日本語・日本文化』投稿規定

1. 資格：本センターまたは関係機関所属教員（非常勤を含む）及び『日本語・日本文化』編集委員会において適当と認められた者。
2. 内容：日本語・日本文化等に関する未発表の研究論文・研究ノート・研究報告等。
3. 体裁：研究論文はA4用紙35字×35行20,000字程度（欧文はA4ダブルスペース30行10,000語程度）、研究ノート・研究報告は10,000字程度（欧文は5,000語程度）。
4. 要旨：本文和文の場合、欧文による要旨（A4ダブルスペース1枚）を、欧文の場合は、和文による要旨（800字程度）を添付。
5. 採否：原稿の採否は『日本語・日本文化』編集委員会が決定。

編集委員

岩井 茂樹 小森 万里 山川 太

日本語・日本文化 第51号

2024年3月10日 発行

編集 大阪大学
発行 日本語日本文化教育センター
〒562-8678
箕面市船場東3-5-10
電話 (072) 730-5459
FAX (072) 730-5074
印刷 株式会社アイジイ